



FUJI WOMEN'S UNIVERSITY

No.69

Jan.20, 2020

藤

藤女子大学
広報



(右)番組収録で共演した箏曲部とフタツメン(若手落語家)
(左)フランシスコ教皇様による東京ドームでのミサ

CONTENTS

- 巻頭言～藤学園100周年に向かって／2
- 2020年4月 子ども教育学科が開設されます／3
- 藤づる～繋がり～／4
- 社会人への第一歩…藤女子大学図書館職場体験レポート／6

巻頭 言



藤学園100周年に向かって

理事長 永田 淑子



殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会
創立者ムッター・マリア・アンゼルマ

1869年11月25日北ドイツの片田舎テュイネで、藤学園の経営母体である私たちの修道会「殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会」が誕生し、昨年11月に創立150周年を迎えました。目の前の病人や子供たちへの愛の奉仕という使命感に駆られて、創立に当たっての様々な苦労や葛藤を神への信頼のうちに乗り越えた、創立者ムッター・マリア・アンゼルマの姿が浮かびます。

さらに同じ昨年11月にフランシスコ教皇様が来日され、長崎・広島・東京でミサを捧げたり、平和構築のための力強いメッセージを発表され、多くの日本人の心を深く動かししました。私も藤学園の皆様を代表する想いで、東京ドームでの教皇ミサに参加して参りました。



また今年、私たちの修道会が札幌の地に到着して100周年。5年後の開校まで、またその後も、幾多の困難と試練に直面しながらも、日本の子女にしっかりした人間観に基づき神の愛を伝えるという使命感に支えられて、教育活動を続けました。

この大きな二つの記念の年を迎え、この機会に藤学園の過去・現在・未来を俯瞰してみたいと思います。

女子教育という使命を帯びて創立されたカトリック学校。それは男女別学の時代に、当然のことでした。札幌藤高等女学校という、5年制高等女学校の誕生です。このことの意味は大きいのです。男子中学校が5年制であった時代に、北海道の高等女学校はほとんどが4年制であったと思われませんが、札幌藤高等女学校は、男子と同じレベルの教育を行うことを目的としていました。創立当初から医学に進む生徒のことも考えて、英語だけではなく、ドイツ語が選択で教えられていました。

藤は良妻賢母を育てることが目標であったと思われていますが、もっと大きな目標があったことがわかります。その証として、戦前の少なからぬ卒業生が、卒業後東京で更に高等教育を受けています。また、戦後すぐに社会の再建に役立つ職業婦人の養成のため、藤女子専門学校を開設したこともあげられます。それを短大制度の誕生と同時に短期大学に転換し、大勢の職業婦人を輩出しました。女子の職場がまだ非常に限定されていた時代に、社会に有能な女性を送り続け、社会の変革を牽引したと言えます。また多くの卒業生たちが、教養のある賢明な妻・母として、社会に与えた影響は大きく、家庭のみならずよりよき社会の実現に貢献しました。

また女子の4年制大学進学希望者のために藤女子大学を開設し、道内の女子の高等教育に大きな貢献をしました。一期生を迎えた1961年、日本の女子の4年制大学進学率は3%程度でしたし、短大と合わせても15%程度という状態でしたが、そのような状況の中で本学が開設されたことの意味を忘れてはなりません。

今、短大・大学を合わせた女子の進学率は50%を超えています。社会も大きく変化し、社会における女性の役割・活躍の場も非常に幅が広がっています。藤学園は時代の先を歩んで教育活動を行ってきました。1992年に人間生活学部を開設した際には、当時では先端的であったヒューマン・エコロジイの理念を基盤に、高等学校で家庭科が男女共修必修となるのに対応できるよう家庭科教員養成を行い、また、道内に養成施設がなかった管理栄養士養成を目指しました。その後、有能な幼稚園教諭や保育士を4年制大学で養成して社会に送り出しました。

今、社会がどういう人材を必要としているかについて、真剣な検討が必要です。もっと地域を住みよくし、さらに世界をより良くする人を養成出来たら、と願います。そのためにはどのような力をもった人材が必要か、大胆に想像力と創造力を使って未来へ進む必要があります。若者の夢・理想を大きく育てたいものです。

2020年4月 子ども教育学科が開設されます

～これからの時代を生きる子ども達の育ちを支える人材の養成を目指して～

これからの時代を生きていく子ども達の育ちを支えていくために、今、日本の教育界では「0歳～18歳までの教育を連続的に捉える」ことの重要性が示されています。子ども教育学科では、これまで保育学科が行ってきた乳幼児の支援や教育に携わる人材の養成を基盤とし、幼児期から青年前期の子どもの心身の発達を連続したひとつの発達過程と捉え、「保幼小連携」において活躍できる優れた保育・教育を担う人材の養成を目指します。



これまで保育学科は1954年の保育専修学校に端を発して以来、北海道の保育者養成を牽引し、人格形成の重要な時期にあたる乳幼児期の子ども達の育ちを支える人材を保育現場に輩出してきました。来年度から新しく開設される子ども教育学科は、これまでの保育学科の養成実践を基盤とし、より現代社会のニーズに応えることができる人材の養成を目指すものです。

現在、幼稚園教育要領を皮切りに、順次改訂されている学習指導要領には、幼・小・中・高のすべてのステージを貫く柱として、教育において育む「資質・能力」が共通に示されています。これからの日本の教育は、子どもの学びを連続的に捉え、生きて働く力を確実に育成していくことが目指されているのです。また、多様化・複雑化する現代社会には様々な問題が山積しています。これらの問題に対応していくためには、子どものみならず、その保護者やまわりの大人の状況をとらえた上で問題解決に向かうことが求められます。

以上の状況に対応するために、来年度から開設する子ども教育学科では、幼児教育と小学校教育の間の段差を解消し、子ども達の学びと育ちを一連の流れとして保障する「保幼小連携」を担う力や、子どもやその周りの大人の現代的課題へアプローチするための専門的知識を有し、地域の人々や関連機関と連携しながら子ども達の育ちを支える力を有した保育者・教育者の養成を目指します。

藤づる～繋がり～

しなやかで長く強い藤づる。
それは藤の学生、卒業生、教職員を繋ぐ絆のよう。

昨年秋、UHB北海道文化放送に勤務されている本学卒業生 H.Yさんから「母校である藤女子大学で番組撮影をさせてほしい。そして是非、在学生のみなさんに見て頂きたい。」と、とても強い思いで企画が持ち込まれました。北海道で落語ブームを起すべく若手落語家4人が女子大で落語ライブを行うというもの。

企画の説明や学生スタッフ探し、PR活動など時間を惜しまず何度も足を運んでくださる姿から、母校や後輩を本当に大切にしてくださっている思いが伝わってきました。ありがとうございました。

今回は、この企画を担当した卒業生と制作を通して交流をした在学生にご寄稿頂きました。



UHB北海道文化放送
編成制作局 制作部
プロデューサー
H.Yさん
英語文化学科 2007年卒業

母校でのテレビ撮影

この度、母校である藤女子大学で『フタツメン』という落語番組の収録をさせていただきました。収録は2019年11月24日、放送は2020年1月4日無事に終わることができました。たくさんの藤女子大学の在学生、ご家族の皆様、教職員の皆様、そして私が在学中にお世話になった先生方にもご協力いただき、卒業生の私にとって幸せなひとときとなったことは言うまでもありません。

撮影場所に母校を選んだのは、藤女子大学があまりに楽しい思い出でいっぱい場所であり、毎日よく笑いよく学んだという充実感に満ちあふれたものであったからです。大学が楽しいなんて高校生の頃の私には信じられませんでした。入学してみるとどの授業も楽しく、学ぶことの楽しさを知りました。単位もかなり取得していたと思います。友人にも恵まれ、今でも一緒に海外旅行をするのは藤女子大学で共に学んだ友人達です。

大学では英語のほかに中国語にも出会い、短期留学をするなど人生を変えるきっかけともなりました。報道部に頼まれてニュースの日本語字幕をつけたり、中国人の方にインタビューしたりと制作部以外でも大変学びが役立っています。おこがましいことではありますが、この落語番組を通じて、藤女子大学って素敵な大学だな、「藤で学びたいな」と一人にでも思っていたら嬉しそうです。収録を通じてあの頃の楽しい思い出が蘇り、社会人になってもなおこの藤女子大学で新たな思い出ができたことは、幸せという言葉に尽きます。ありがとうございました。



フタツメン落語会PRのため、
H.Yさんと卒業生の
UHBアナウンサー
S.Nさんが来学



日本語・日本文学科
4年
K.Cさん

卒業生との交流

—落語と番組制作を通して—

「落語を知っていますか？」

テレビ取材のカメラを前にして、私はこの質問をされました。もちろんとても驚きました。なぜなら、インタビューをされたのは藤女子大学大学祭の真っ最中で、私はてっきり大学祭の取材でインタビューされたかと思ったからです。ですが、

この質問から私と卒業生のH.Yさんとの交流が始まったのです。

インタビューの数日後、H.Yさんからメールが届き、テレビの企画に参加させていただくことになりました。正直、私はとても不安でした。私は落語がもともと好きなのですが、実際の落語家の方を前にして、落語について話ることができるか自信がなかったのです。ですが、打ち合わせの際、H.Yさんは大変気さくに話しかけてくださり、私の不安は払拭されました。

番組撮影の日、H.Yさんは打ち合わせの時とは全く異なる真剣な表情でお仕事をされており、いかに熱意をもってお仕事をされているかがええました。

私は落語と番組の制作を通して藤女子大学の卒業生との交流を行いました。大変短い間ではありましたが、この交流を通して様々なことを学べたと実感しています。特に、真剣に働いている先輩の姿が見られたことは貴重な体験だと考えております。この体験で、私が大学を卒業した後、どのように働き自己実現していくかを思い描くことができ、働くことに対するモチベーションへとつながりました。私もいつか後輩に誇らしく思われるような卒業生となり、社会に貢献したいです。



左から 春風亭昇羊さん、立川志の太郎さん、柳亭市弥さん、春風亭昇々さん
フタツメン番組収録の様子



さっぽろコミュニケーションTV学生リポーター奮闘中!



英語文化学科 3年 M.Yさん
 日本語・日本文学科 3年 I.Kさん
 文化総合学科 3年 M.Eさん

私たちは「さっぽろコミュニケーションTV」という番組に学生リポーターとして出演しています。番組では環境の取り組みの3R(リユース、リデュース、リサイクル)をテーマに札幌市内の様々な施設に伺い、そこで行われている取り組みを調査しレポートしています。初回の放送では秋元市長にお会いし、札幌をゴミが一番少ない街にするために、私たち一人ひとりが出来る

ことを市長と一緒に考えました。私たちが一番驚いたことは、札幌市内だけで、食べ残しや手つかずの食品がそのまま廃棄される食品ロスが年間約2万トンも発生していることです。札幌市では身近な取り組みとして、毎週日曜日に家庭の冷蔵庫を整理し食品ロスを減らすことを呼びかけています。

この収録を通して、私たちが出来る環境問題への取り組みが身近なところからあるという事を改めて感じさせられました。今後学生リポーターとして学んだ事を学内に発信し、札幌市のゴミ問題について学生が関心を向けられるようなイベントを企画していきたいと考えています。そして札幌に住む者として、住みやすい街づくりに少しでも貢献できたらなと思っております。



それぞれが愛用しているエコグッズを持って



「さっぽろコミュニケーションTV」
 毎週日曜日 午前11時55分からTVh(テレビ北海道)で放送中!



藤女子大学の国際交流

アメリカ短期研修、ウェスタンワシントン大学との交流について

藤女子大学は、春休み(2020年2月～3月)に2週間のアメリカ短期研修を実施します。研修では英語を学び、さらにその英語を現地で使ってみるアクティビティーがプラスされており、今回は地元高校の日本語授業アシスタントに挑戦します。

派遣先のウェスタンワシントン大学は、アメリカ西海岸ワシントン州の海と山に囲まれた自然豊かな環境にありながら、大都市シアトルとのアクセスもよい場所にあります。今後は、藤ACEプログラムの派遣先として、より長い期間の語学留学や学部留学も開始の予定です。



ウェスタンワシントン大学キャンパス



藤で学んでいる留学生紹介

藤女子大学や北海道は、留学生の目から見てどんなところでしょうか。2019年9月から、藤女子大学に留学中の2名に、お話を聞いてみました。



W.Yさん(台湾出身)

もともとアニメやドラマを通じて、日本の文化に関心をもっていました。先輩から、藤の先生や学生さんは優しく留学生をサポートしてくれる、という話を聞いて留学を決めました。北海道はラベンダーの花畑や、青い池など、きれいな場所として台湾でも有名です。留学中に、スキーにもチャレンジしたいです。



S.Hさん(台湾出身)

来日前のイメージと比べて、実際の北海道は寒く、マンションなどの高い建物が多い印象です。今は、留学生のための日本語授業と、日本人学生と一緒に異文化コミュニケーション、日本語学、アイヌ文化などを学んでいます。台湾では、アイヌのことはあまり知られていません。でも授業でアイヌの歌を聞き、とても面白いと感じています。



オーストラリア短期研修に参加して

食物栄養学科 2年 O.Aさん

今回オーストラリア短期研修に参加し、はじめはクラスの英語のレベルの高さに驚き、ついていけるかとても不安でしたが、みんな優しく親切で友達もたくさんできたため私の不安は徐々に消えていきました。学校が終わった後や休日は友達やホストファミリーと遊びに行ったり、学校のアクティビティーに参加したりと、とても楽しい毎日を過ごしました。中でもホストマザーの妹と二人でムービーワールドに行ったことは一生の思い出です。この研修に参加したことにより、いろいろな国の友達ができ、様々な言語、文化に触れ、とてもいい経験ができたと思います。私はこの研修を通して、恐れずに挑戦することの大切さを改めて実感することができました。とても楽しく充実した一か月を過ごすことができたので参加してよかったです。



社会人への 第一歩…

藤女子大学図書館 職場体験レポート



～中学生・高校生が職業体験にやってきました!～

藤女子大学図書館では毎年中学生・高校生の職業体験を実施しております。2019年度も北16条キャンパス図書館と花川キャンパス図書館あわせて10名の職業体験を行いました。特に今年度は図書館司書に興味のある生徒さんの多い年でもありました。中学生と高校生の体験内容は多少異なりますが、本学図書館の概要、施設見学、図書館業務の説明、文庫本のフィルムかけ、本の修理、図書館カウンター業務（貸出・返却）、返本業務、書架整齊業務、蔵書検索（OPAC検索）およびデータベース検索実習など盛りだくさんの内容となりました。短い時間ではありましたが藤女子大学図書館で体験した経験を「司書」という将来の職業選択に活かしてもらえれば幸いです。なお、藤女子大学では図書館情報学課程を毎週土曜日に開講しており、文学部と人間生活学部の2学部6学科の学生と一緒に学んでいます。所定の単位を取得すれば司書および司書教諭、学校司書となる資格が得られます。

※司書教諭は教職課程受講者および教員免許取得者のみです。



体験後、参加した生徒さんから寄せられた感想をご紹介します。

●花川キャンパス図書館●

2019年10月29日(火)

とても貴重な経験になりました。貸出・返却や配架など、楽しみながら学ぶことができました。学校でやっていることより本格的で、図書館で働いたらと、想像しながら話を聞き、仕事をすることができて楽しかったです。

(石狩市立樽川中学校2年 S.Sさん)

職場体験学習では、図書館の様々なことを学ぶことができました。中でも特に整齊作業が大変だと感じました。中学校よりも細かく本が分けられていて、1冊1冊見ながらも素早く場所が間違っている本を見つける姿はさすがプロだなと感じました。

(石狩市立樽川中学校2年 F.Aさん)

●北16条キャンパス図書館●

2019年9月11日(水)・13日(金)・10月16日(水)

図書館の本格的な仕事をたくさん体験することが出来て良かったです。普段は出来ない本のカバー貼りや修復の作業、書庫の中での配架作業など楽しんですることができました。地下書庫の自動で動く本棚に驚き、多目的スペースがとても充実していたことも驚きました。やさしく丁寧に教えてくださってとても分かりやすかったです。

(市立札幌平岸高等学校2年 W.Rさん)

図書館での体験は優しく丁寧に教えていただき、とても嬉しく思いました。また、書庫は常時開放していることに胸が高まり、とても楽しいひと時を過ごすことができました。大好きな古い本の香りがたくさんして、また行きたいと思いました。

(幌延町立幌延中学校3年 H.Nさん)

ずっと気になっていた図書館司書のことについて学べて良かったです。仕事内容が知りたかったので嬉しく、特に文庫本にフィルムをかけるのが楽しかったです。配架も少し難しかったですが、普段できない体験ができ、細かな作業が好きなので本のカバー補修も楽しかったです。図書館司書について学んで、体験ができて、自分の中で良いものを得ることが出来ました。

(市立札幌平岸高等学校2年 S.Mさん)



興味があった図書館での仕事を体験することができ、本当に嬉しかったです。カウンター業務などの見える仕事や、本の補修、配架、整齊など利用者の方からは見えない仕事を実際に働いてみることで、その大変さや楽しさがよく分かりました。本格的に司書の仕事を目指して勉強し、図書館で働きたいと思いました。将来にも活かせる貴重な経験になりました。

(市立札幌平岸高等学校2年 T.Hさん)



図書館司書を体験して実感したことは、細かくて外には見えない仕事が多いということです。配架や書架整齊業務は慎重に作業する必要があり、本を並べる場所を見つけるのが難しかったです。しかし、これから図書館を利用する時にも役に立つことなので良い経験になりました。また、カウンター業務でのコミュニケーションの必要性と、利用者へ居心地の良い場所を提供することも大切だと思いました。

(市立札幌藻岩高等学校2年 T.Mさん)



今まで図書館を利用する中で裏では一体どのようなことをしているのだろうと思っていましたが、今回の実習でそれがわかり、自分が思っていたよりも奥深く、そして根気の必要な職業だとわかりました。カウンター業務も利用者への対応、個人情報を守ることなど大変だと思いました。今回のお話や貴重な体験を通じて、新しい発見もありました。

(北海道札幌手稲高等学校1年 T.Yさん)

図書館のお仕事を学んで体験をして、すごく力仕事で大変だと感じました。本の貸出や返却の体験では慣れてくるとスムーズに作業ができるようになり楽しかったです。また、配架や本の補修体験は静かに本を棚に戻したり、破れているカバーを直したりするのが楽しかったです。これからはもっと本を読んで自分の読んでこなかった分野にも視野を広げていきたいと思います。

(北海道札幌手稲高等学校1年 Y.Aさん)



事前に調べていた仕事内容を実際に体験することができて、より理解が深まりました。本の補修作業は最初はなれませんでした。最終的には自分の文庫本にうまく貼ることができました。本の貸出、返却作業が一番難しかったです。地下の集密書庫がボタンを押すと自動で動くことに驚きました。本を書架に戻す作業が一番楽しかったです。

(北海道札幌手稲高等学校1年 M.Aさん)



職業体験希望者の受け入れにあたって

図書館長 渡邊 浩

周知のとおり近年図書館の在り方は大きく変わりつつあります。図書館の側からすると、かつてのように来館者を待っているのではなく、社会のニーズに応じて積極的に来館を促すような発想が求められるようになりました。図書館本来の役割である情報や助言の提供はもちろん、特定分野の資料を充実させて得意分野を作ったり、イベント開催等とおして図書館の利用価値をアピールしたりと、それぞれの図書館が工夫を凝らしている姿が見られます。社会や地域への貢献が求められている点では大学図書館も同様です。本学の図書館では、数年前から

「オープン・ライブラリー」というかたちで、高校生への利用提供を始めましたが、さらに中高生への職業体験の提供や同窓生による利用促進も含めた、よりオープンな形での「オープン・ライブラリー」を目指しています。職業体験として中高生を受け入れるようになったのは、ここ10年くらいのことです。当初は中学生が中心でしたが、ここ数年は高校生の参加も増えてきています。一般の企業や施設などよりも図書館を選んでやって来る生徒さんたちなので、皆さん、本や図書館、より具体的には司書という職業に明確な関心をお持ちです。礼状や感想文にはいつも印象に残る体験となった様子が綴られており、図書館としてもやり甲斐を感じています。今後も読書好きの生徒さんたちを応援して行きたいと考えています。

高校生のための オープン・ライブラリー

開催中

詳しい開館日程、時間は図書館ホームページでご確認ください。

URL: <https://www.fujijoshi.ac.jp/library/>

※初めて利用される方は生徒手帳を持参してください。



大学へのご支援ありがとうございます

藤女子大学の寄付募集活動は、みなさまの温かいご支援により、2012年度からの累計が1億5千万円に達しました。寄付募集につきまして深いご理解とご協力を心よりお礼申し上げ、ここに感謝の意を表しご芳名を掲載させていただきます。2019年度のご寄付につきましては、次号の広報「藤」にて、使途等をご報告いたします。

寄付者ご芳名 (第15回) 期間 2019年4月1日～2019年9月30日 (敬称略・お申込順)

〈保護者〉	〈卒業生〉	〈旧教職員・旧役員〉	〈その他、法人等〉	
三上 修 小澤 美和 勝山 格 猪狩 智子 菊地 基 鈴木 光 澤井 篤司 木村 浩 古永 能裕	小松 義幸 能登 仁 井上龍一郎 北村 和也 田中 誠一 小林 法夫 (南三陽商産) 匿名 14名 計 29名	阿部和加子 大月あずさ 高田 礼子 田中美千子 平尾 恭子 濫谷 真希 (ホクシン・エステート(株)) 匿名 2名 計 8名	水野 佑亮 三浦 良一 田中 弥八 Flórez Generoso 相原 宗一 黒川 昭和 橋本 伸也 大西 正男 知地 英征 匿名 3名 計 12名	株式会社 苫造園土木 (医) 阿部小児科医院 藤の実会 物部 憲一 (ロメウス弦楽四重奏団ヴィオラ演奏者) 計 4名

計53件 2,335,000円

2012年度実績：377件 12,081,866円	2015年度実績：181件 6,402,354円	2017年度実績：153件 10,983,201円
2013年度実績：277件 17,413,757円	2016年度実績：179件 16,758,365円	2018年度実績：126件 13,001,473円
2014年度実績：191件 76,223,954円		

2012年4月～2019年9月末までの累計 155,199,970円

小松秀之様より、2019年2月にお亡くなりになったご令姉 小松直子様 (文学部国文学科第25回卒業生) のご遺志として、11月14日に高額なご寄付を賜りました。

生前、直子様は「母校に少しでも役立つような寄付を…」とお話されていたそうです。直子様を偲び、故人のご遺志とご遺族の想いを未来につなぐ形で、活用させていただきたいと考えております。今後、具体的な活用方法が決まり次第、紙面にてご報告させていただきます。

故人とご遺族の皆様の御心に感謝し、慎んで故人のご冥福をお祈り申し上げます。

大会入賞の記録

2019.12現在

本学の学生が各大会において優秀な成績を収めました。
おめでとうございます。



第45回「北海道女子学生剣道優勝大会」
(2019年9月16日)

●優勝 藤女子大学剣道部



第37回「全日本中国語スピーチコンテスト北海道大会」
(2019年10月13日)

●暗誦の部 優勝 / ●大会特別賞
英語文化学科3年 北川 真帆さん
●朗読の部 準優勝 英語文化学科1年 高木 茜実さん

心よりご冥福をお祈りいたします。

元藤女子短期大学一般教育 教授
川端 ひろ子様

2019年6月23日ご逝去 77歳
1964年札幌慈恵女子高等学校に教諭として勤務。
1965年4月藤女子大学助手として着任。1966年藤女子短期大学講師、1972年助教授、1979年教授。1999年3月退職。
1986年5月札幌市民芸術祭受賞。



元藤女子大学事務局長、藤学園法人事務局事務局長
Sr.M. クリスティナ 山田 千鶴様

2019年8月4日ご帰天 102歳
1952年7月藤女子高等学校事務室勤務。
1961年4月藤女子大学事務局長として着任。藤学園法人事務局兼任。
1967年9月藤学園法人事務局事務局長。1987年3月退職。



元藤女子大学職員
岩永 栄美子様

2019年1月22日ご逝去 81歳
1976年7月公仕室職員として勤務。1998年3月退職。



藤女子大学 未来共創フォーラム 2019

報告

今年度で3年目となる「藤女子大学未来共創フォーラム」は、これまでのシンポジウム形式のほか、ワークショップやチャペルコンサートなど全3回にわたり開催致しました。たくさんのご来場ありがとうございました。



第1回 6月8日(土)

第1回 6月8日(土)

私たちが語る女子大の魅力
～女子大学の価値を改めて問い直す～

- 基調講演講師
加藤千恵氏 (京都光華女子大学教授)
- ワークショップコーディネーター
宮本奏氏 本学卒業生
(NPOファシリテーションきたのわ代表)



第2回 6月29日(土)

第2回 6月29日(土)

チャペルコンサート

- 出演
阿部雅子氏 / ソプラノ
西山まりえ氏 / バロックハープ・オルガン
濱元智行氏 / パーカッション
細岡ゆき氏 / リコーダー



第3回 11月10日(日)

第3回 11月10日(日)

人生100年時代を迎えて
～今、次世代と共に生きる意味について考える～

- 基調講演講師
藤井美穂氏 (時計台記念病院副院長)
- シンポジウム講師
奥村昌子氏 本学卒業生
(北海道情報大学准教授)
外崎由香氏 本学大学院修生
(北海道カラーデザイン研究室代表)
- コーディネーター
隈元晴子 (本学准教授)

藤女子大学学生聖歌隊

チャペルコンサートと
これまでを振り返って

聖歌隊代表

日本語・日本文学科 3年 N.Mさん

聖歌隊は2018年9月のチャペル完成に合わせて結成され、活動開始から1年が経過しました。慰霊祭やクリスマスのミサ、入学式などのさまざまな行事で宗教音楽を歌う機会があり、日々充実した活動をしています。

昨年10月に開催された藤陽祭において、ミニコンサートを開催させていただきました。普段は儀式的間に歌っている宗教音楽を、



ひとつの音楽として聴いてもらい、楽しんでいただくのはめったにないことです。練習を重ね、より良いものをお届けできたと思います。お楽しみいただけていたら幸いです。

聖歌隊が行事で歌うたび、「ありがとう」「素敵だったよ」と声をかけられることがあります。儀式的静粛な雰囲気の中、聖歌隊がその空気をいっそう研ぎ澄まされたものにするお手伝いできているようで非常にありがたく思っております。また次の行事に向けても身の引き締まる思いです。常により良い歌を届けられるよう努力していきます。

まだまだ発足して間もない聖歌隊ですが、これからも歌声を通して彩り豊かな学生生活を作り上げていきたいです。応援よろしくお願いたします。

～藤女子大学学生聖歌隊募集中～

お問い合わせおよびお申込みは、北16条キャンパス学生課までお願いします。

藤女子大学は学生の様々な活動を応援します!

中国語スピーチ大会への挑戦



文学部
英語文化学科
3年
K.Mさん

私は英語文化学科の第二言語として、中国語を学んでいます。当初は、日本人に馴染みのある漢字が使われていることから、取り組みやすいだろうという不純な動機により学び始めました。しかし学んでいくにつれ、中国語の発音の美しさ、奥深さなどに徐々に魅了されていきました。そこで、学校のみならず、中国語の会話サークルに加入し、幅広い年代の異業種の方々と共に研鑽を積んで参りました。そうしたところ、中国語スピーチ大会の開催がある事を知り、自分がどのくらいのレベルに達しているかを知りたく、出場することにしました。大会前は、ゼミや講義の空き時間に自主練習を繰り返しました。また、先生の熱心なご指導や、多くの方のお力添えもあり、昨年10月に行われた「全日本中国語スピーチコンテスト北海道大会」で、暗誦の部の優勝と、大会特別賞を受賞することができました。今まで積み重ねてきた練習の成果が評価されて、大変嬉しかったです。



そしてもうひとつ私が力を注いでいるものに日本舞踊があります。踊りが好きで、4歳から習い続けています。その影響もあり、他の日本文化や芸術に対してもとても興味が有り、特に歌舞伎や能などの舞台芸術について勉強しています。このような日本人の美意識が結集された伝統文化を海外の方々に伝えていきたいという思いがあります。将来は、海外に日本の伝統文化のすばらしさを発信していけるような仕事をしたいと思っております。そのために残り少ない学生生活ですが、中国語だけではなく、専攻である英語にも更に入力して、学んでいきたいと思っております。



藤花祭で十二単着装体験(ゼミ活動)



人間生活学部
人間生活学科
3年
N.Hさん

私の所属する被服学ゼミでは、昨年10月の藤花祭で十二単(俗称)の展示・着装体験を行いました。2019年は令和へと元号が変わり、それに伴い上皇后陛下の過去の十二単姿を各メディアが報じました。日常生活に馴染みの無い装束に大変興味を持ち、その後行われる「即位礼正殿の儀」においても注目が集まると考えました。そこで十二単の魅力を藤花祭で紹介したいと、ゼミで着装体験を企画しました。製作にあたり、まずは十二単について絵画・文献資料から情報を集め、装束のイメージを明確にしました。そして和裁の授業で得た基本的な技術を応用させ、やわらかさを出すために手縫いにこだわり、全員が満足 of いく十二単を完成させました。また、平安時代のイメージを出すため、小道具や背景などの環境づくりにも力を入れました。



藤花祭当日は、子どもから大人まで(他学科の先生や卒業生の方も)、幅広い年齢層の方が体験に訪れました。「とても良かった」「こんなに重いなんて…」と十二単について知っていたが、皆で達成感を噛み締めました。しかし子どもには十二単のイメージが伝わりにくく、例えば、かぐや姫のイラストを示して興味を惹くような工夫があれば、より楽しんでもらえたかもしれないと思いました。



私は将来、子どもを対象としたイベントの企画制作に携わりたいと考えています。今回の経験から、計画性や協同性の重要性を学び、これらを活かして夢の実現に繋げたいです。また、卒業研究では今回の反省点を踏まえて改善を図り、改めて子どもを中心とした衣装の着装体験を企画しようと思っております。

素顔の先生 第11回

日本語・日本文学科 教授

種田 和加子先生



▲研究会メンバーと

▲幼少の頃

サヴァティカル中▶



第11回目の「素顔の先生」のインタビューは、日本文学、近現代文学などの科目を担当され、長年に亘り泉鏡花などについて研究されてきた日本語・日本文学科の種田和加子先生です。ファッションから恋愛まで普段は絶対聞けない話をたくさん伺いました。

Q1. 中学や高校時代の学生生活について教えてください。

転勤族だったので、小学校は全部で三ヶ所の学校に通いました。私にとっては入学と卒業が同じ学校というのは中学だけです。

新潟の市立の中学でした。そのころ、全学のアイドルみたいな人がいて、私も憧れて。でも30歳くらいの時に会ったらね、つまらない人だったの。中学とか高校のすごく素敵な人って、そのまま素敵とは限らないのね。そうじゃない？ 単にいいひと。何でもできるけど、特別なものを持ってなくて。がっかりです！ 高校ははじめ新潟の女子校に入って、その後1年目の夏に父の転勤の関係で東京の私立の女子校に編入しました。大学まである学校でしたが、私は他の共学の大学に進学しました。これまで過ごした中では、札幌が一番長く住んでいることになりませんが、ひっこしが多かったせいか、「定住」は苦手です。

Q2. 大学生の時の一日のスケジュールを教えてください。

語学を履修し終えた3年生の頃は、お昼すぎに大学へ向かっていました。でも池袋駅から大学までの道で友人とばったり会ったり、学校へ行かずに喫茶店で議論したり、映画館へ行くことも多々ありました。昔はほら、出席を取らなかったから。パゾリーニの映画とか、ATG系とか難解なものほどいいと信じこんでとにかく映画はよく見ました。それから、アルバイトで家庭教師をしていました。一言でいえば、「自分探し」の期間が大学生時代です。そう、皆さんも大いに友人と議論して下さいね。

Q3. 先生はどうして大学院に行こうと思われたのですか、また研究者になろうと思ったきっかけを教えてください。

研究者になりたいと思って大学院に行ったわけではなく、

大学院に行ったのはもう少し勉強したいと思ったからです。また親はあきらめていたらしく、就職についてあまり干渉しなかったので大学院生活も長くやりました。修士課程は4年間かかり、修士論文(泉鏡花)は、自分としては不満だらけでしたが、口頭試問などの評価がまあそこそこ良かったため、先に行こうかなと思い、博士課程に進みました。研究であとに引けないと思ったのは30歳くらいの時です。論文で自分を追い詰めて。また、そうでないといけないものですね。

Q4. ファッションのこだわりはありますか？ (いつもおしゃれなので)

そんなにこだわりはありませんが、なるべくその日の自分の気分にあったものを着るようにはしています。気分が下がっているときはモノトーンの服です。学生の前に出るときは緊張感というか、改まった気持ちがあるので、そういう部分は服装に出ているかもしれないですね。小説を読んでいても服装の描写はとても気になります。特に着物に関してうまいのは立原正秋。

Q5. 恋愛について何か一言。

フフフ…まあ皆さんと同じです。(?)
……私はやっぱり大人の男性がいいです。若くても何でも精神が大人のひとがいい。子供っぽいと持ち上げてあげなきゃいけないでしょ。面白くて頭のいい人なら、80代でも20代でも私はいいですよ。むこうさえ良ければね。

Q6. 今後の目標について教えてください。

2冊目の本(現代文学について)を出したいと思っています。1冊目(泉鏡花論)は2012年に出しましたがそれも遅かった。2冊目はどうしても。金原ひとみ論をいれるつもりです。



日本語・日本文学科 3年 W.Yさん

普段はとても凛としていらっしゃる先生のお茶目な一面がよく分かる座談会だったと思います。ここに全て書けないのがとても残念ですが、笑いの絶えない、本当に楽しいひと時でした。



日本語・日本文学科 3年 N.Yさん

先生の恋愛についてのお話は面白い。恋をする先生を見てみたいものです。それにしても、「何でもできる人は特別なものを持っていない」のくだりは目から鱗でした(笑)。



日本語・日本文学科 3年 W.Yさん

先生の学生時代のエピソードや私生活についてたくさんお話を伺うことができました。先生の幼少時代のお写真も見せていただいて、謎の多い先生のいろいろな一面を知ることができてとても楽しかったです。



日本語・日本文学科 3年 F.Aさん

今までは知らなかった先生のプライベートについて教えて頂き、新たな一面を知ることができました。先生がサヴァティカルイヤーをバリで過ごした時のお話や、〈服装〉についてのお話などが特に印象に残っています。



日本語・日本文学科 3年 H.Mさん

普段、種田先生にプライベートな質問をすることが減多になので、今回色々な話を聞けてとても面白かったです。また、自分自身の進路について改めて考える良い機会となり、とても有意義な時間となりました。

1907年にドイツから来日し、札幌を中心に宣教活動を始めていたフランシスコ会の責任者であったヴェンセスラウス・キノルド神父は、北海道の宣教のために教育活動が必要であると考えました。そこで1914年に女子教育を行うために故国ドイツの女子修道会からの派遣を要請し、私たちの修道会「殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会」がその要請に応じてシスターを派遣することを決定。その年の7月9日に北ドイツのテュイネから、シスター・クサヴェラ・レーメを含む4人のシスターたちが出発しました。再び故国の土を踏むことも、愛する家族やシスターたちとの再会もない覚悟の出発です。

ドイツの真中あたりのフルダに寄り、そこから宣教師として日本へ派遣されるフランシスコ会の4人の司祭たちと合流。そしてイタリアのアシジに行き、そこからローマに行きます。ローマでは教皇ピオ10世の謁見を賜り、使命のために祝福をいただきました。その後、7月27日にナポリからドイツ船リュツォフ号で出港。30日にはポートサイドに到着し、スエズ運河を通過。翌31日にロシアとドイツの間で戦争が勃発したという知らせが入り、英国も戦争に参入することが懸念され、その先の寄港地アーデンもコロンボも英国領であることから、船は中立のスエズ港に戻りました。

8月6日には英国船が来て、リュツォフ号が航行できないように係留し、船員も乗客も戦争捕虜になった状態に。それで翌日から船上で日本語の勉強です。兵役

義務のあるドイツ人はすべて召集され、4人の同行司祭のうち3人はドイツ行きの切符が手配されてお別れ。

8月20日には、教皇ピオ10世逝去の悲しい知らせを船上で聴きます。日本にも行くことができず、ドイツへ帰国する手段を探し回り、ついに8月26日にオランダ船に乗船。イタリアのジェノアで下船して鉄道でスイスとオーストリアを通過してフルダに立ち寄り、そこでスエズで別れた3人の司祭たちとも再会できました。

9月8日にようやくテュイネの修道院に戻ることができ、無事な再会を喜びのうちに神に感謝しました。この日、シスター・クサヴェラは次のように日記に記しています。「時が来たなら、愛する神様は私たちが日本でのミッションの働きに協力するため、すべてを導いてくださると希望する。」

これが4年間も続く大戦になるとは、その時は誰も考えませんでした。



1914年に出発した4人。向かって右端がSr.M.クサヴェラ、真中は総長



フランシスコ教皇様ご来日

「すべてのいのちを守るため」というテーマで来日され、核兵器の使用のみならず保有も道義的に許されないと明確に宣言され、被爆者たち、原発被災者たちにも会われました。

若者たちの抱えている苦しみや孤独にも共感され、彼らを励まされました。

本学はカトリック大学として、教皇の言葉を大切にしていける使命があると思います。